

## 生活の統御者

人は、眼、耳、鼻、舌、身の五官を持ち、これによつて人とつながり、社会と融合する。故に五官の動きは、自己及び社会の全てを左右する。

近頃仏教が再び大衆の心に求められる傾向が盛んになったと言われる。これは嬉しいことである。そしてその傾向が、かなり真剣なものだと言われる。全てに行き詰まった社会が、一度棄てた仏教をかへりみて来たのであるから、それが当然である。

そしてそれが真剣であるだけ直接生活の上に生かさうとする傾向が強いこともありまへである。

釈尊は、その御臨終に当つて、高遠なことを説かないで、卑近な戒を説かれた。それが、ずっと続けて出ている遺教経である。戒律とは生活のことである。内心の信念が体の上に顕われた生活の形式のことである。

何でも古くなつて腐つて来ると、その説く所のみ深くなつて、形を重ぜなくなり、あるいは形だけ尊んで、その生命がぬけて来る。仏教も確かにそうした傾向が深くなつて、どうにもならなくなつてゐる。もし仏教が復興するとすれば、形の上にも、そしてその内的生命の上にも、大革命があることであろう。

釈尊は、眼、耳、鼻、舌、身の五官を制えよと教えられた。

蓮如様は「我が心にまかせずして心をせめよ。仏法は心のつまるものかと思へば信心におんなくさみ候」と言はれた。心すべきことである。

浄土真宗が、念仏をあまり申せば自力になる。生活を生かせと言えば自力になる。といった具合に、何でも生活の上に仏の教を生かせば自力になるように考え、他力とは、何もしないで浄土に参られると教えるもののように思われたことがある。否、今でも正しく仏教を語れば、異安心よばわりする所がある。これでは滅亡以外に何もなくなるであろう。

天理教だとか、金光教だとか、人の道だとか、大変な勢いで発展するのに、色々な原因もあるが、直接、実践主義であることがその発展の一大原因である。

人間の手によつて為し得ること、道德の教だけですら為し得ることを為し得ない時、その不都合を教理で弁護しようとしたのが、過去の仏教ではなかつたか。

私どもは、浄土真宗の教えが真実であるという信念をどうすることも出来ない。しかし、それがそれであればあるだけ、いよいよ正しく教えを受け取つて生活しなければならぬと切念する。

身にもしてならぬことをし、口にも言うまじきことを言つて、それが大腰にされるようになったのが、仏教者であるかの如く考へてはならない。

如来本願の前には、善悪はない。善悪一如の境において、いよいよ善事をなさんと心がけ、如来本願の前には賢愚一如であることがわかりぬいて、ますます教えを聞いて深まってゆく所に、ほんとうの信の世界があるのでないか。大愚に至ってはじめて智慧が光り、大悪に覚めて、はじめて如来の善力がわかる。

新らしいと任じた青年たちは、一時、宗教を否定し、人間の憂を無視し、道徳を排斥し、人間の魂を否定し、個人生活を眼中におかず、ただ大衆と言ひ社会と言ひ漠然たるものの意志のみを重んじて、一切を憎み、反抗して、生きようとする傾向が強動いていた。

こうした世界に無関心な青年たちは、理想を失い、道を失って、ただ本能的な、享樂の巷に足をふみ入れて惑溺した。しかし、こうした二つの傾向のいづれもが、人間の正しい生き方ではなかった。今にしてそれがわかつて来た。

あたら、青年が夜なくをカフェーに費して、貴重なる時間と精神を失つてしまひ、コツ／＼真面目に自己を築きあげることが忘れて、青春の日を空費することは、最も悲しむべきことである。

眼の後にこれを統制する眼が必要である。

耳の奥に、耳を統制する耳が必要である。

鼻の奥に、鼻を制御する鼻が必要である。

舌の後に、舌を制御する、嚮くわが必要である。

身の後に、身を制御する、御者が必要である。

如来本願の大信心がそれである。

眼、耳、鼻、舌、身の五官を欲の支配にのみまかせておけば、いわゆる享樂主義の生活が生れて来る。

花を見れば美しいと見る眼ではあるが、それが仏を拝む眼に使われ、耳は美しい音のみ聞かうとする耳ではあるが、み法を聞く耳に使はれ、舌は食事の美味を求める舌ではあるが、法味を愛樂する舌に使はれ、身は享樂を求める体ではあるが、合掌の相となり、求道のために動き、報謝のために働き、如来の生きたもう舞台となる時、体があるがために知り得る法蔵の本願であることがわかる。

救われるとは、人格の主の座に如来の本願が君臨して、煩惱の立場なからしめ、一切の煩惱を客位に平伏せしめ、主客顛倒して、如来の智慧光のみものを言うことである。

その時五官は、仏の本願に統御せられるであろう。されば『安心決定抄』には、「色身二法（身と心）、三業（身、口、意の三業）、四威儀（行往座臥）すべて報仏の功德の至らぬ所なければ、南無の機と阿弥陀仏の片時も離ることなければ、念々みな南無阿弥陀仏なり。」

とあり、仏凡一体の境である。誠に聞法に徹底して、大行によつて統一せられたる生活を成就すべきである。

生活の真実義は、人生の具体的な世界において、如来を顕現する生活の成就より外にはあり得ない。  
如来は生活の統御者である。大信心は人格の根本主義である。